**レッスン：13M**

**テーマ：現在のパーソナリティーの形成**

**MAC13: WPD/ENM/PK.9**

 私の兄弟・姉妹達、

スピリット、光、火の子供達。私達は常に神、絶対、神の聖性に抱かれています。

　　多くの人々、そして現代の神秘家でさえ、永遠のパーソナリティーはいわゆる魂のセルフ・エピグノーシス(Soul Self-Epignosis)以外の何ものかである、と考えていますが、そうではありません。永遠のパーソナリティーは魂のセルフ・エピグノーシスなのですが、それ自身から何かを投射する地点から見るとき、それは永遠のパーソナリティーのセルフ・エピグノーシスと呼ばれるのです。

魂の永遠のパーソナリティーであるセルフ・エピグノーシスがそれ自身から実存の諸世界に何かを投射するのはこの地点であり、この投射されたスパークがいわゆる現在のパーソナリティーを**転生させるスパークなのです**。

それゆえ、永遠のパーソナリティーは魂のセルフ・エピグノーシスなのですが、魂のセルフ・エピグノーシスは常にそれ自身の内に非顕現の状態で有している能力を、今や現わしているのです。

　　多くの神秘家はこの点で混乱しており、永遠のパーソナリティーは私達の中の死ぬと考えられている部分であり、それが不死を帯びるようになり、それがまた滅び、再び不死を帯びる、と述べています。そういうことはありえません。なぜなら、

永遠のパーソナリティーは神の本質の特質を完全に表現しており、従ってそれはどのようなフォーム、いかなる無知の境界の中にも制限されることはないからです。

さらに、それ自身の非常に微細な部分のみが、二元性の諸世界、生の現象の諸世界に下降、あるいは投射してくるのです。ですから、

永遠のパーソナリティーは神であり、絶対英知、絶対善、絶対パワーである神の本質の特徴を完全に表現していることを、十分に理解し、明確にする必要があります。

それでは永遠のパーソナリティーと現在のパーソナリティーの関係は何でしょうか？その関係とは、現在のパーソナリティーを転生させ、永遠のパーソナリティーに属するか、あるいはその部分であるそのスパーク、それが永遠のアトムと呼ばれるスパークなのです。

この永遠のアトムは各転生を通じて常に同じであり、各パーソナリティーおよび全てのパーソナリティーを現在のパーソナリティーとして転生させるためにLifeの現象の諸世界に下降するのは、この同じ永遠のアトムなのです。

私達はしばしば永遠のアトムをひとつの単体として述べていますが、実際にはそうではないのです。なぜなら、

**永遠のアトムは三つが一つになっているからです。現在のパーソナリティーの各体はそれ自身の永遠のアトムを有しており、このようにして私達にはノエティカルの永遠のアトムが一つ、サイキカルの永遠のアトムが一つ、粗雑な肉体の永遠のアトムが一つあるのです。**

三つの永遠のアトムが一つになって現在のパーソナリティーを転生させ、すばやく無知の中に入るのです。

“無知の中に入る”とはどういう意味なのでしょうか？それは、永遠のパーソナリティーからのこのスパークがもはやその本質である特徴を表現することをせず、境界・制限・無知の中に入るのです。

そうなるのには理由、目的があるのでしょうか？

その理由とは、このスパーク、**この現在のパーソナリティーが何かを獲得するためです。**何が獲得できるのでしょうか？それは、誰か他人における“私であること”(I'ness)とは異なった何かである“私は私である”(I am I)と言えるようになるために、

いわゆる現在のパーソナリティーという個別性を獲得するためです。

これを達成するための唯一の方法は経験することです。つまり、時間・空間の意味内という限界の中で、現在のパーソナリティーとしての彼あるいは彼女の動きを通じて人間が経る体験です。それゆえ、現在のパーソナリティーはその自己実現、その個別性を獲得するという目的のためにのみ、無知という制限の中に入るのであり、それ以外の目的はありません。

Page2

　　さて、各現在のパーソナリティーを通じてなされた経験はどこに記録されているのでしょうか？それらはいわゆる潜在意識に記録されています。しかしそれでは、現在のパーソナリティーと潜在意識の関係はどうなっているのでしょうか？以前のレッッスンにおいて、

現在のパーソナリティーはそれ以前の全ての転生の総計である、と述べました。しかし、それは具体的にどういう意味でしょうか？その意味するところは、

**いわゆる潜在意識は各転生を通じて同じであり、その人の潜在意識の中に記録されているものは全て、各“新しい”現在のパーソナリティーにおいて表現されるようになるのです。**

　　さて、潜在意識といわゆる永遠のアトムの関係は何であり、永遠のアトムが私達の潜在意識である、と見なすことができるのでしょうか？先に、永遠のアトムは一つの永遠のパーソナリティーのあらゆる現在のパーソナリティーを転生させるスパークである、と述べました。

各転生において継続的にやって来て、去っていくのはこの永遠のアトムであり、このようにして連続性が保たれ、連続する各現在のパーソナリティーに新たな経験が追加されるのです。

　　それでは、永遠のアトムといわゆる現在のパーソナリティーの潜在意識との関係はどうでしょうか？ある意味では、永遠のアトムは潜在意識ですが、別の意味ではこの永遠のアトムはそれ以上のものです。

それ以上のものと言う意味は、

永遠のアトムはそれ自身の中に永遠のパーソナリティーのスパーク、つまり魂のセルフ・エピグノーシスのスパークを有しているという事実にあります。それはまた、私達の諸体のいわゆるダブル・エーテリックを形成させる原因であるスパークです。ですから、永遠のアトムはいわゆる潜在意識ですが、それと全く同一ではありません。永遠のアトムはさらに、非常に重要な意味で潜在意識から影響を受けています。どのように？私達の潜在意識はいわゆる永遠のアトムの形とサイズに影響を与えるのです。

　　以前のレッスンで、永遠のアトムは最初は不定形であり、その三つの体は全てその中心をハートのセンターにおいている、と述べました。初めは三つの体は全て非常に小さいのですが、潜在意識に経験を記録していく結果として、気づきが増して、これらの不定形な体の再形成が始めるようになります。ですから、私達の潜在意識は永遠のアトムである不定形の諸体に影響を及ぼす、あるいはその形の再形成に向けて影響を及ぼすのです。

さて、再形成という場合、それは元型にもとづいて再び形成されねばならないことを意味します。なぜなら、再形成するためには、もとになるフォームが必要だからです。それらの不定形な体はどの元型に従って再形成されるのでしょうか？それは粗雑な物質である肉体の形に従って形成されるのか、あるいは他に私達がまだ知らない、使っていない体があるのでしょうか？答えはイエスであり、

私達には“美しい諸体”、あるいは魂のセルフ・エピグノーシスの“最も完全な諸体”、現在のパーソナリティーのフォームを保ち、それもまた魂のセルフ・エピグノーシスのスパークである永遠のアトムのスパークとつながっているインナーセルフのスパークがあるのです。

ですから、形が再形成されるという時、それらの諸体、魂のセルフ・エピグノーシスの“美しい諸体”と同じようになるのです。

　　以前のレッスンで、再形成が生じる時にはそれらの諸体のセンター、永遠のアトムの諸センターが互いに離れる、と述べました。健康としての肉体のセンターは下に下がり、ノエティカル体のセンターは上方に移動し、再形成が完成した時にはノエティカル体のセンターは頭のセンターにあり、肉体のセンターは太陽神経叢にあります。その時初めて、現在のパーソナリティーはそれらの諸体を互いに別々に使うことができるようになるのです。

　　それらの諸体を別々に使うと私達が言う時、勿論それは厳密には正しくありません。なぜなら、誰も克服できない法則があり、その法則によって、上の二つの体なしでは誰も下位の体を通じて彼あるいは彼女自身を表現することはできない、と定められているからです。しかし、下位の体を使わずに上位の二つの体を使うことはでき、また下位の二つの体を使わずに上の体を使うことはできます。

page3

　　これについてもっと詳しく触れましょう。誰かが寝ている時に、いわゆるサイコノエティカル体を分離した体として使って現して肉体を離れる時、このパーソナリティーは肉体の中にいた時と同じような制限を持つでしょうか？答えは勿論ノーです。なぜなら、それに成功するためには、現在のパーソナリティーのいわゆる不定形な体の再形成を完成させていることが前提になるからです。

さて、このパーソナリティーはまたサイキカル体を使用することなくノエティカル体のみを使用することもできます。しかし、このパーソナリティーは肉体の時と同様に、サイキカル体を背後に残したまま去るのでしょうか？答えはノーです。そのパーソナリティーがノエティカル体の中で表現される時に、サイキカル体が体の中に残されないとしたら、サイキカル体はどうなるのでしょうか？

　　理論的に生じることは、**サイキカル体の波動が上昇し、その結果ノエティカル体の中に吸収され、その結果何も背後に残されないのです。勿論、これは自分の諸体をマスターし、現在のパーソナリティーの諸体が完全に再形成されて、エクソマトーシス（＊明晰な意識を保っている幽体離脱）の能力を得た人だけに可能です。**

　　ノエティカル体の中へのサイキカル体の同化・吸収を、いわゆる“二番目の死”と呼んでいるミステリースクールもあります。

この現象は転生のサイクルの中にあるのでしょうか？いいえ、それは転生のサイクル内のことではありません。なぜなら、進化のサイクルにある現在のパーソナリティーは、それらの諸体を分離することができないからです。

このプロセスは他のシステム、他の惑星、他の銀河系等における他の人間を助けることが目的である時のみ、行なわれるのです。

なぜなら、一つの惑星から別の惑星に旅行する時には、全ての天体がその中で遊泳しているマインドの波動の中に入らねばならないからです。マインドのそれらの波動はいわゆるサブスタンスおよびスーパーサブスタンスであり、物質のバイブレーションではありません。サブスタンスとスーパーサブスタンスはノエティカルおよびノエティック界のものであり、体のためのものではなく、ヒポスタシスのためのものです。体という言葉を使わずに、ヒポスタシス（＊状態にあること、基礎となるサブスタンス）という言葉を使う理由は、誰かが自分の諸体をマスターしたということは、それらの体はもはやいかなる限界の中にも閉じ込められておらず、いかなる形あるいはフォームという限界にも縛られていないからです。

　　さて、**潜在意識が永遠のアトムの形とサイズに影響を及ぼし、現在のパーソナリティーの気づきのレベルを決める、**と述べた先のポイントに戻ります。

さて、潜在意識のどの部分が私達の気づきのレベルを示しているのでしょうか？勿論その部分はまた、不定形な体の再形成に影響を及ぼす部分でもあるのですが、一体どの部分なのでしょうか？もし私達の潜在意識を海と見なすならば、その海のレベルはその海の中に含まれるもの全て、その海の表面にあるもの全ての結果です。それは思考・行動の仕方であり、特定の気づきのレベルです。私達は決して、潜在意識の水をかき回すべきではありません。なぜなら、もしそうすると今、今日の現在のパーソナリティーにとって受け入れることのできない過去を、気づきの表面のレベルに浮上させることになるからです。

**海のこのレベルが、不定形な体の再形成をさせる部分です。**

　　さて、真理の探究者は自分の気づきを上昇させるために何をすべきでしょうか？以前のレッスンで述べたように、探究者はその（海の）レベル、海の表面にサジェスチョン（示唆、暗示）を置く必要があります。そしてサジェスチョンがそこに残されて死んでしまい、海の深いところで見失われることのないようにする必要があります。それゆえ、静かな状態で潜在意識の中にそれらのサジェスチョンを置いて、表面にサジェスチョンを置く際に水をかき回さないようにするのです。私達は自分たちの幼児性を理解しようとする必要があります。

**現在のパーソナリティーと戦ってはいけません。いかなる仕方であれ、現在のパーソナリティーを抑圧してはいけません。なぜなら、そうすることによって潜在意識の水をかき回すことになるからです。**

page4

　　複数の現れを示すパーソナリティーのケース（＊多重人格）では、このことが明らかです。その理由は、誰の中にも表現可能な全てがあるからです。なぜでしょうか？なぜなら、各体の間のつながり、コネクションがゆるやかになっており、そのため潜在意識へのドアーが開かれていて、自分以外の他のいかなるパーソナリティーでも簡単に表現可能であり、内側から表現できるのです。つまり、ある一人のパーソナリティーは、自分自身のエレメンタルと同様に、他のパーソナリティーを示すいかなるエレメンタルともつながり、交流し、それを表現することができる、ということを意味します。彼らはつながり、交流し、それらを表現することができるのです。もしあなた方が彼らと話をし、彼らの言うことに耳を傾けるなら、そこに彼ら以外にもう一人の人間がいると考えるかもしれません。なぜなら、ある瞬間には一人のパーソナリティーが話し、次の瞬間には別のパーソナリティーが答えるからです。

　　それを行っているのはそれらのパーソナリティーではなく、エレメンタルであり、他のパーソナリティーのエレメンタルがその人を通じて話しているのです。このような場合には、影響を受けているそのパーソナリティーの潜在意識のドアーを閉じる必要があります。エレメンタルは決して解体することはありません。なぜなら、それは時間・空間の意味内で動いているからです。しかし、もしあなたがそのエレメンタルにフォーカスしなければ、そのエレメンタルのエネルギーを低下させることはできます。あなたがエレメンタルにフォーカスすればするほど、そのエレメンタルにエネルギーを与えることになります。それは法則です。否定的状態に向けた肯定的思考（ポジティブ思考）というものは存在しません。そのエレメンタルからエネルギーを取り去る唯一の方法は、そのパーソナリティーがそれ以外のものにフォーカスすることです。そうすればそのエレメンタルは徐々にエネルギーを失っていきます。恐らく、邪魔しないようにと、エレメンタルに向かって説得することができるかもしれません。しかし、それは短期間のみであり、あるいは長期間可能かもしれません。しかし、そのエレメンタルは依然としてエネルギーを与えられる可能性があり、それ自身を再び表現できる状況が来るまで待っているのです。しかし、フォーカスを移せばそのエレメンタルからエネルギーを取り去ることができます。なぜなら、エネルギー付与はそのパーソナリティーが無意識にやっているからです。

　　**私達がそこから自由になろうとする全てのエレメンタルは、原則として私達からの多くの愛によってエネルギーが除去される必要があります。**

パーソナリティーがそれらのエレメンタルからうまく解放されるか否かは、時間・空間の意味内でその人が生きた時に創造したものによります。この場合、原因・結果の法則が最終的決定となります。それゆえ、一度、霊的なヒーラーが助けを与えた後は、最終的結果はそのヒーラーによるのではなくて原因・結果の法則によるのです。

　　さて、私達の潜在意識から、あるいは汎宇宙的無意識からどのようなエレメンタルが浮上しようとも、成長というものがあるので、それは最悪となります。もちろん、気づきの上昇の結果ではない知識が表現されることもありますが、しかし、その知識ですらそのパーソナリティーの両手の中で進むことはできないのです。それゆえ、水を穏やかに保ち、波立たせないようにするために、ドアーを閉じておく必要があります。さもないと、何かが生じ、それらのエレメンタルを表面に浮上させるかもしれません。

潜在意識に記録されているものは全てエレメンタルの形で記録されており、何か不適切なことによってそれらが表面に浮上する可能性があります。

時には、それらは別のパーソナリティーを示す声として表現され、それらを悪魔と呼ぶ人々もいます。

　　エレメンタルは経験を意味し、時にはそれらは幻想、ファンタジーとして現れることさえあります。ファンタジーですらリアリティーの結果です。私達は無から何かを表現することはできません。現在のパーソナリティーが自分の存在を認識し、進んでいく唯一の方法は、経験を通じてです。そうです、それらの経験をするためには何かが必要であり、この何かとはほかでもない二元性なのです。言い換えれば、もし私達が問いと答えとして二元性を表現しなければ、私達は自分の存在を認識することができず、もしこの二元性が停止すれば、植物になるという現象があります。

ですから、この二元性はLifeの現象の中で役立っているのです。この二元性が表現されるためには、それは人間のフォーム（形体）においてでなければならず、そのフォームは人間のイデアの中にあるのです。二元性がイデアというフォームとして、創造のセル(\*cell、小室、房）の中にあり、それは人間のフォームと同一なのです。私達には二つの目があり、一つの鼻が二つの部分に分かれています…。私達にはその形体として二元性がありますが、この二元性は二元、対極する二元の諸世界においてのみ役立ちます。私達はリアリティーを表現しない意味を持っていますが、それらは善・悪の意味と同じように無知による創造です。

page5

　　私達にはガイダンス、理解、忍耐が必要です。私達は潜在意識の中にサジェスチョン（示唆）を置き、それらのサジェスチョンが表面に残されている必要があります。勿論、私達には忍耐が求められ、自らに時間を与える必要があります。“ローマは一日にして成らず”という言葉は、私達全員に意味を持っています。

　　真理の探究者はまた、過去に繰り返し述べたことを真剣に受け止める必要があります。それは

現在のパーソナリティーに関する真摯なワークを始めるために、自分の現れの真のレベルを見い出すことの重要性です。

もし私達がこれを行わないなら、それは流砂の上に自分の基礎を置くのと同じであり、すぐに壁が崩れ落ちてしまいます。

**自分のエピグノーシス(Epignosis)と思考・行動の仕方としての気づきのレベルがマッチしないことに気がつき、また緊張のために自分の足元で地面が揺れているのがわかった時には、それは人生における警告です。**

悪いのは、間違っているのは（自分ではなく）相手だと言い、そう考えたところで、自分が相手に影響されたという事実は、自分の家が秩序だっていないことを示しています。

　　結局私達全員は自分自身の基礎を堅固なものにすることから初め、もし他の人々に用意ができている場合はその人々にも同じようにさせるのです。多くの人々は一緒に道を登り初め、道が広くてスムースなうちは一緒に歩むのはとても楽しく、もっと冒険に満ちた道を望むことすらあります。しかし、やがて道は狭くなり、一人で道を歩まざるを得なくなり、自分自身の強さと資源が唯一の仲間となる時も来るのです。このような時には、堅固な基礎、そして山をも動かす信念が必要となるのです。そしてもし万一、十分な装備をしていないことに気づいたなら、歩みを止め、適切な装備をする方が賢明です。なぜなら、登山者に合わせて道が変化するわけではないからです。望まない冒険を数多く繰り返すことなく頂上に到達するには、登山者の方で道にあった装備をしなければならないからです。

私達はみな常に神、絶対、神の聖性に抱かれています。

EREVNA/MAC/M13.WPD/KP9/ M13/5END